

モンゴル高原における宿営地の選定について

小長谷有紀（国立民族学博物館）

モンゴル高原において、遊牧民は季節的な宿営地をどのように選定しているのだろうか。地形、植生、土壌などの諸条件を放牧する家畜の種類と季節とに応じて選択する、とされている。まず、そうした諸条件に先立つべき重要な観点を提示したうえで、そうした諸条件についてどのように語られているか、ということを紹介する。

- 1) 季節的な宿営地は一般に「4季」に応じて選ぶものであると解説されるが、基本的には「2期」であろう。4季節を意味するモンゴル語は、次のような潜在的な意味をもっている。すなわち、冬は寒冷を特徴とする閉鎖的時空間であり、そこから解放されると、夏の開放的時空間があり、また冬へもどる。

春営地	khavar jaa	ハバルジャー	（寒さが）減少する
夏営地	zuslan	ゾスラン	→開放された空間
秋営地	namar jaa	ナマルジャー	（寒さが）増加する
冬営地	obor joo	ウブルジョオ	→閉鎖的な空間

- 2) どこが良いかという place（絶対空間論）を求めようとしても、実際の環境は条件が変動するので、良いところはそのつど変化するどこかという space（相対空間論）である。むしろ、交換することそのものが重要である。たとえば、「草の根を休ませる」といった表現のほかに、次のような語彙がある。

Sorgogchilokh まだ食べられていない所へ家畜が行く（自動詞）

Uitgarshuulakhagui 家畜を飽きさせない

- 3) モンゴルの遊牧は越冬が決め手である。たとえば、次のような表現がある。

ond orokh 年に入る＝越冬する（冬季は時間軸においても閉鎖的）

冬の挨拶「オンの時に太って入りましたか？」（冬の寒い時期に家畜は肥えているか？）

オンのある家畜＝冬と春に耐えられる家畜

秋にオトルをすると、頻繁な草地交換によってよく肥えて、越冬能力が増す。

注1「オトル」とは、宿営地を離れて、牧人が群れだけを遠隔な放牧地へ移動させるという出張形式の放牧方法のこと。たとえば、避難、去勢馬（＝せん馬）群（＝非生活財）などをオトルに出す。実は、TRANSUMANCE の原義（生活中心から離れる移動）に等しい。社会主義時代に、生活様式の定着化と生業方式の移動化を同時に果たす方法として積極的に推進された。

- 4) モンゴル人民共和国時代の農牧業大臣や首相を務めた J. サンボー氏の名著『牧民に与ふる助言』（1958）には、宿営地の選定について、次のような順序で記述されている。

「家畜の種類に、土壌と草を適応させるべし」まず、土壌が言及されており、その重要性がわかる。

ヒツジには、小さな丘のある、表層土壌の多い、根の多いところが良い。イネ科、ニガヨモギ、野生ネギ、野生ニラ、ノビルなどが良い。ヤギは一般にヒツジ群のなかの 20 パーセント程度を

しめて先達役をになう。したがって、ヒツジと同じ。ただし、ヤギ単独群の場合は、谷筋のある山、小山の土壌の固いところが良い。ハネガヤ草、アネモネ、豆科、野生ネギ類などが良い。ウマについては、ヒツジやヤギの適地と差異がない。ヤクについては、ヤギの適地に類似する。ウシには、土壌が柔らかく、しかし砂地でないところが良い。河岸の芝が良いからといって、ずっと同種の草地で放牧すると太らせることができない。

ラクダには、ゴビ（一般名詞）で、低地、窪地、山の少ない広大なところが良い。ニガヨモギ、カミツレなどなど適する草の種類が多くあげられている。

「4季に応じて変えるべし」とある。宿営地とは家畜の寝床である。

夏営地は、小さな丘で、涼風が吹き、土壌の多い土地を選ぶ必要がある。こういう所で寝た家畜は、朝の涼しい時間帯に食べるのが好きになる。逆に、湿気が多いとか、山の南側の窪地や、日のよくあたるところは、「ホト」して寝る家畜には向かない。夏および秋の最初の半分は、小家畜「ボグ・マル」の寝床はしょっちゅう変える必要がある。秋営地は、山の南側を中心に、少々凹凸があり、それでいて狭くない、広々としたところ。とはいえ、ネズミの穴が多いところや、ソーダ性の水のあるところは、ラクダ以外には向かない。冬営地や春営地は、風の少ない、日当たりのよいところ。しかし、河岸で灌木の無いようなところは、向かない。

注2「ホト」は、モンゴル国では概してウランバートル（＝首都）を指す。また、フフホトなどのように都市名になっている。町の意味をもつモンゴル語である。ただし、その原義は、家畜の寝床であり、テント群によって囲われた擬似的な閉鎖空間を指す。すなわち、人が集まることによって成立する広場である。

注3「ボグ」は、「ボド」と対になっており、それぞれ小家畜（ヒツジ・ヤギ）と大家畜（ウシ・ウマ・ラクダ）として区別しうる。一般に家畜の換算単位としてSSU（Sheep Stock Unit）が使用される。しかし、モンゴルでは伝統的にボドを採用しており、いわば **Horse Stock Unit** であった。換算比率はおおよそ以下の通りである。ヒツジ1：ヤギ0.5：ウシ・ウマ・ラクダ5～7。つまり、ウマを1頭得るのに、ヒツジ5頭と交換されるというように、大型家畜を交換するための換算単位である。

「宿営地から放牧地（水場）を選定する」が、これは1日の行動範囲に等しく、距離で示される。

妊娠しているウシ、子連れウシ、出産後8ヶ月までのウシは、4～5キロ

出産後のラクダは、1～2キロ

子ラクダが草をはむようになったら、2～5キロ

不妊ラクダ群は、子連れラクダ群とは別にすること

出産の近づいたヒツジ・ヤギ群は、2～3キロ

出産後の搾乳メスおよび子群は、3～6キロ以内に

注4「ソバイ」とは、妊娠していないメスをさし、オスおよび去勢オスを意味するエルと連語になって、エル・ソバイという群れが構成される。搾乳用の群れ（妊娠メス、産後の母、子連れ）と分けられる。

動物の「行動を見ると、草地の選択が妥当かどうかわかる」という動物行動学的まなざしが卓

越する。

ウマは、草の適したものを自分で選び、下唇で草を区別し、まだ噛まれていないものを、均等に噛みむしって食べる。ヒツジは、草の最も細くて栄養のあるところをむしって食べる。ヤギは、草の先端および灌木の枝葉、まめなどを食べる。したがって、ヒツジの群れに入れると、群れの先端もしくは周辺に行く。

ウシは、均等に密生した草を舌で巻いて食べる。ラクダについては、植物名を指定している。どの家畜においても、まだ噛まれていない草が不足すると、草の根まで集め噛み砕き、落ちた枯れ草などを砂といっしょに食べてしまうようになるので、成長が鈍り、また太ることができない。

日々の放牧の方法については、多様性が重視されている。

春の新緑の季節には、枯れ草とともに食べているので、1日2回の水分補給が必要である。新しく生えたニラやアネモネばかりを食べさせると、病になる。草に水分が満ちてくれば、1日1回の水やりをおこなう。夏の草原では、少なくとも1週間に3回は放牧地を換えて、いろいろな草を食べさせる。新鮮な草を食べるようにすると、健康で肥える。微風に向かって丘の上に横列をつくってあげる。広々したところに展開して食べるのが好きである。ラクダには傾斜地が不向き。

家畜種ごとに、晩春から夏と秋と越冬についての諸注意事項が並び、動物の移動特性が言及される。

涼しい日には、ヒツジ・ヤギは苦い草を食べるものである。ラクダはとくに毛の落ちる頃になると、じっとしていられなくなる（移動兆候）。一箇所にとどまった馬群は太らないし、子馬の乳の飲みも悪くなる。

氷雨の降る前に水やりをすると、風に追われやすくなる。搾乳期の牝馬の放牧地は、近いところにして、頻繁に変える。

5) ロシア人シムコフによる実態報告（定着化の施策が進行する以前の実態を示している。）

Shimukov (1933) のアルハンガイ県イフタミル郡の事例

平均10～20キロメートル。山がちな距離は短くなり、低い山の背を超えているような場合の距離は長くなる。植生がよく、雪害や干害も無いので、移動の必要があまりない。夏営地と冬営地があり、春営地や秋営地はない。夏営地は、河岸のオープンスペースであり、大きな河のデンジにある。冬に利用できない河岸の、ヘンズ khenz（草ばえの遅いもの）の多いところ、ハエやカの少ないところを利用する。冬営地は、主として支流の源泉など、風がない、風除けがある、ところを利用する。一年に7～8回移動する。

Shimukov (1934) の類型区分

「ハンガイ型」ハンガイとは、満ち足りたところの原義のある、森林ステップのこと。中央部の山脈名称。夏は河岸、冬は山ろく。7～8キロ範囲。

「平原型」夏は平原、冬は山中。両者の区別は少ない。30～50キロ範囲。

「西モンゴル型」現地の地形の影響で、夏は高山、秋は平原、冬は低山の3箇所をめぐる。100キロ範囲。

「ハンガイ南部型」夏は山中の川源、冬はゴビまで南下。150～200キロ範囲。

「ドルノド（東部）型」ハンガイ型に似ている。夏はケルレン河、冬はヘンテイ山。100キロ範囲。

「ゴビ型」夏は平地、冬はやや山。150～200キロ範囲。

6) 地理学者バザルグルらによる実態報告（1989 年刊行）

- ・アルハンガイ県：ハンガイ山脈 1700～2100m 高の南面で冬と春を過ごし、夏に川辺へ出る。
- ・バヤンウルギー県：アルタイ山脈 1600～2000m の山口で冬、1600m の山ろくで春、2500m 以上で夏、1600m の谷で秋をすごす。
- ・バヤンホンゴル県：アルタイ山脈の南面 1700～2000m で冬と春、山あいには広がった谷で夏、秋にゴビの草を追う。
- ・ボルガン県：1500～1700m の山口で冬、1200～1400m の山ろくで春、1200～1300m の河岸で夏と秋をすごす。
- ・ゴビアルタイ県：ゴビアルタイ山脈の 1800～2400m の南面で冬、1400～1800m の山ろくで春、2400～3000m の山頂で夏、1200～1400m のゴビで秋をすごす。
- ・ドルノド県：700～900m の平原で冬と春、河岸で夏、秋をすごす。ウシが川辺、ヒツジはより山手。
- ・ドルノゴビ県：1000m の丘で冬と春、900～1000m の広い谷で夏、ゴビの方で秋をすごす。
- ・ドンドゴビ県：1200～1400m の丘で冬と春、広い谷で夏、ゴビで秋をすごす。
- ・ザブハン県：1800～2500m の南面で冬、1300～2000m の山ろくで春、1200～1800m の川岸で夏、1300～1800m の山ろくにもどって秋をすごす。
- ・ウブスハンガイ県：1800～2300m で夏、山の支脈で冬、春、ゴビで秋。
- ・ウムノゴビ県：1400～1800m の南面で冬と春、1600～2300m の広い谷で夏、1100～1300 メートルまで降りて秋をすごす。
- ・スフバートル県：1000～1100m の丘で冬と春、900～1000m の広い谷で夏、ゴビの方へ秋。
- ・セレンゲ県：1400m 程度の南面で冬と春、川のデンジや山ろくで夏と秋をすごす。
- ・中央県：1550～1700m の南面で冬、1400～1600m の山ろくで春、1300～1500m の川岸で夏、南の方あるいは山際へ秋。
- ・オブス県：1700～2000m の南側で冬、春、山の平らな頂で夏、川岸で秋をすごす。
- ・ホブド県：1600～2500m の南面で冬、1600m の山ろくで春、2500～3800m 山の平らな頂で夏、1200～1400m の川岸、湖岸、山間の谷で秋をすごす。
- ・フブスグル県：1200～1300m の川岸で冬、春、1300～1400m の川岸で夏、秋をすごす。
- ・ヘンテイ県：1200～1300m の川岸渚木林、山口で冬と春、1300～1400m の広い谷で夏と秋。



図1 モンゴル地形図 (ビ・ダンガダシ『モンゴルの経済・地理学』p. 9)

ルハグヴァスレン 「現代モンゴルの遊牧移動について」

民博通信72号 PP. 77～87 より

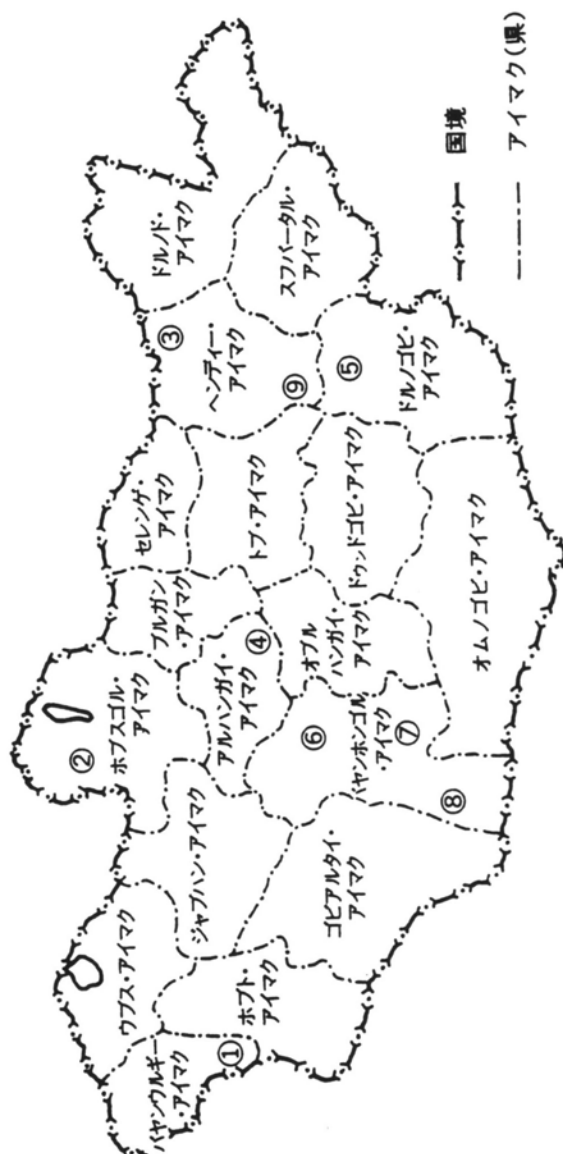


図2 モンゴル国の行政区画

(ビ・ダンガタシ『モンゴルの経済・地理学』P. 60を一部改編)

ルハグヴァスレン 「現代モンゴルの遊牧移動について」

民博通信72号 PP. 77~87 より

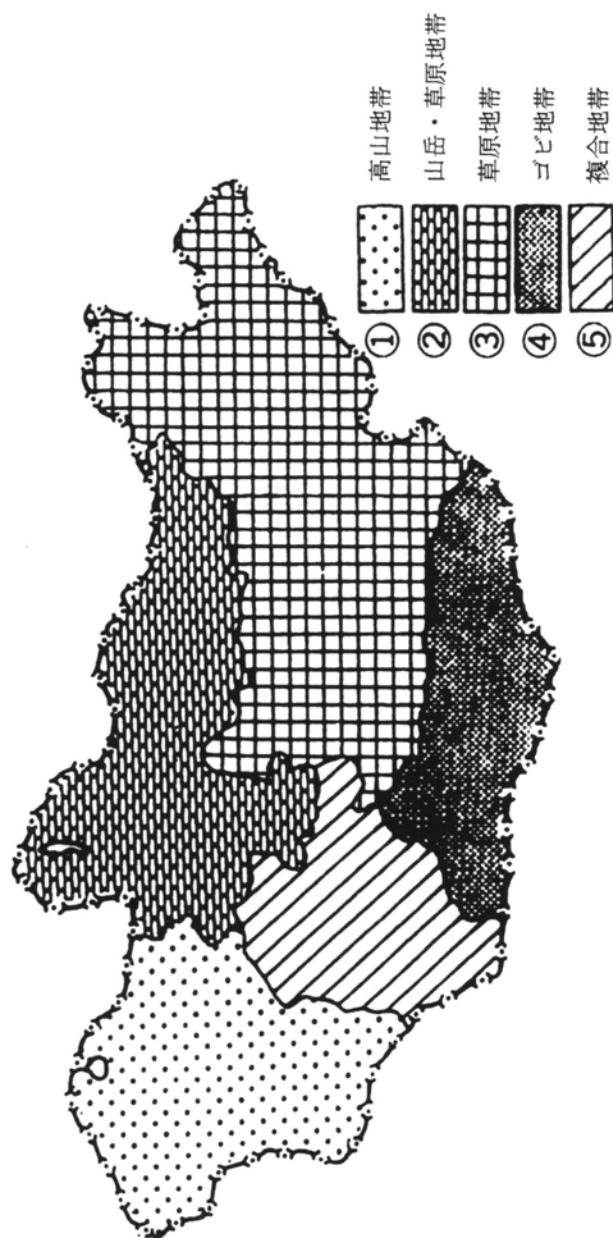


図3 モンゴルの遊牧地帯

(ゲ・シルニン『モンゴルの農業地理学』P. 127)
 ルハグヴァスレン「現代モンゴルの遊牧移動について」
 民博通信72号PP. 77~87 より